

3 イネ主要害虫の発生動向

セジロウンカ、トビイロウンカ

両種とも梅雨の時期に中国大陸や東南アジアから吹く偏西風のジェット気流に乗って飛来してくる。セジロウンカの発生はここ数年、県内では普通に認められているが被害を起こすほどの発生には至っていない。トビイロウンカは1998年に多発し、坪枯れの被害が出たが、それ以降は海外からの飛来数も少なく、ほとんど認められない。

いずれも、長期残効型の箱施用剤の普及により発生が大きく減少した害虫であるが、夏期に高温が続くと飛来数は少なくとも突発的に多発し、被害が出ることもあるため今後も予察情報等に注意し、発生状況をよく把握しておくことが必要である。

ツマグロヨコバイ

イネの全期間を通じて発生するが、よほど多発しない限り吸汁害を受けることは無い。以前はほ場での発生は非常に多かったが、長期残効型の箱施用剤の導入以降はその数は激減している（図参照）。フィプロニル剤を使用した場合には多発することがあり、収穫間際に排泄物に発生するすす病により、葉や穂が黒く汚れることがある。近隣府県では萎縮病の被害が出ている地域も多いが、兵庫県での発生は少ない。本種は発生地域周辺で越冬するため、多発したほ場では翌年は春期から発生が多くなるので注意する。

イネツトムシ

ほ場周辺の雑草内で幼虫越冬し、その後羽化した成虫が6月頃からイネに移動する。6月以降に移植されたイネで被害が多く、止葉が第2世代幼虫に加害されると減収につながるため、出穂前後の発生には注意を要する。また、5月以前に移植されたイネではほとんど被害は出ないため、防除は不要となる。近年の発生は少なく経過している。

斑点米カメムシ類

多くのカメムシ類が加害するが、兵庫県での主要種はクモヘリカメムシとアカスジカスミカメである。クモヘリカメムシは周辺ほ場で越冬し、その後イタリアンライグラス等イネ科雑草を加害後、出穂期にイネに移動する。アカスジカスミカメはイネ科雑草内で卵越冬する。4月頃から幼虫が発生し、イネ科雑草で2世代経過後イネに移動する。近年の暖冬傾向により越冬虫の数も多く、春先のイネ科雑草の子実の着果量も多いため、春期の密度は高くなることから、今後も発生状況には注意が必要である。

防除上の注意点

長期残効型の箱施用剤の導入により、害虫の発生状況は大きく様変わりし、生育期における防除機会が少なくなってきた。それだけに箱施用剤の選択には注意を要する。鱗翅目害虫が多い場合はフィプロニル剤を、ツマグロヨコバイが増えてきた場合にはイミダククロプリド剤を使用するなど、地域の病害虫の発生動向を考慮した適切な薬剤の選択が重要である。

二井清友（農業技セ・病害虫防除部）

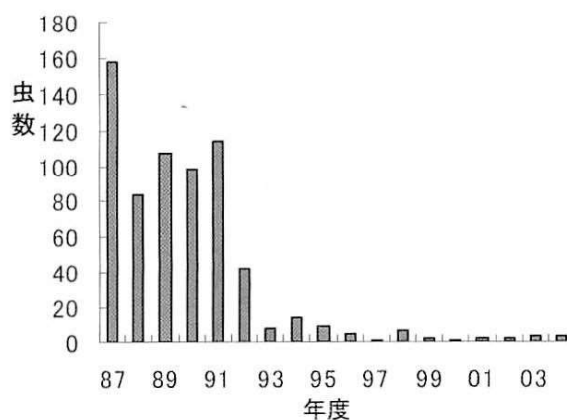


図 ツマグロヨコバイの虫数の推移
(8月下旬、10回振、県内120カ所平均)